



発行 真宗大谷派 高山教務所
発行者 出雲路 善公
〒506-0857 高山市鉄砲町6番地
☎(0577)32-0776
*毎月20日発行 50,000部
三市一郡無料配布
印刷 山都印刷株式会社

念じられ
照らされて

和国の教主聖徳皇

北條 頼宗



略歴
一九六二年、新潟県上越市生まれ。東京大谷専修学院卒業。早稲田大学卒業。
真宗大谷派高山教区照行寺住職。高山教区教区会議長。

親鸞聖人は、ご和讃において聖徳太子の徳を讃え、「和国の教主聖徳皇、広大恩徳謝しがたし」と、太子を日本に誕生されたお釈迦様であり、その恩徳は謝しても謝することができないほど深く深いと述べられています。
真宗寺院には、若き日の太子のお姿が絵像として掲げてあります。聖人は、太子をお釈迦様としてだけではなく、さらに「救世観音大菩薩、聖徳皇と示現して」とあるように、民衆に深く信仰されていた救世観音菩薩の生まれ変わりとして仰いでおられます。
太子のことに少しふれておきますと、太子が生きた時代は西暦574〜622年と言われています。飛鳥時代、

初めの女性天皇である推古天皇の摂政として、天皇に代わり、政治を担われた方です。
太子は、それまで外国の宗教であった仏教を正式に日本に受け入れた方です。さらに、その仏の教えを中心に据えて、日本で初めての憲法である『十七条憲法』を定められたことは特筆すべきことだと思います。
太子は、『十七条憲法』のなかで、まず第一条に「和らかなるをもつて貴しとなす」と、この国を和らかなる国にしたいと高らかに宣言しています。そして、第二条には「篤く三宝を敬え。三宝とは仏・法・僧なり」と、そのためには仏法僧の三宝に帰依することが大事なこととしてあげられて

います。仏法僧の三宝に帰依するということは、仏弟子となるということですから、つまり、この国の人々が皆仏弟子となり、仏の教えを聞く身となっていくことによつて、この国を「和」の国としていこうと表されています。さらに第五条には「財有るものが訟は、石をもて水に投ぐるが如し。乏しき者の訴は、水をもて石に投ぐるに似たり」と述べて、貧しく力無き者・声なき者の声を聞くのが、政治に携わる者の本来のすがたであると明らかにされています。
親鸞聖人は、この第五条に深く感銘されたようで、「とめるものうたえは、石を水に投ぐるがごとくなり。ともしきも

ののあらそひは、水を石に投ぐるにたりけり」と和讃しています。
飛鳥時代と比べることは不適切かもしれませんが、現代においても政治が平等に貧しい人・無名の人・無力の人の声を聞いていくような姿になっているかということを考えますと、1400年以上前に仏教に基づく平等の視点をもっていた太子には驚かされます。こういうところにも、太子が後に民衆から救世観音、つまり、権力から打ち捨てられた、世の中の声なき人々の声を聞いてくださる菩薩様の生まれ変わりだと信仰されていく一端があると思います。
聖人は9歳で、両親家族のもとを離れ、出家して比叡山に入られました。20年間の修行を積んでいかれますが、その中で多くの苦悩を抱えておられたようです。19歳の時には、太子の遺骨が納められている磯長(大阪府南河内郡)の聖徳太子廟に籠られ、そこで「汝の命根まさに十余歳なるべし」という夢告をうけられます。そして、この夢告の示す10年後を目前にして、29歳の時に、太子建立と伝えられる六角堂にて百日の参籠を行い、そこで救世菩薩の夢告を受けて、吉水の法然上人のもとへと赴かれたと伝

Table with 2 columns: Date and Event. Includes '9月28日 親鸞聖人ご命日法座' and '10月3日 ご坊文化講座'.

秋の彼岸会。永代経法要
亡き方をご縁として仏法に出遇う大切な仏事です。ぜひお参りください。
9月20日(木)~26日(水)
午後1時から勤行・法話
20日(木) 内記 浄氏 (往還寺住職)
21日(金) 帰雲 真智氏 (還來寺住職)
22日(土) 小原 正憲氏 (専念寺住職)
23日(日) 竹田 雅文氏 (東等寺住職)
24日(月) 三島 多聞氏 (高山別院輪番)
25日(火) 小谷 秀道氏 (蓮勝寺住職)
26日(水) 四衢 亮氏 (不遠寺住職)
ご坊の美味しいおはぎ 上記期間中販売しています!

えられています。
これらを鑑みますと、聖人は少年の頃から、自分ではどうしても解くことのできない大きな課題を抱えられた時に、太子ゆかりの場所に身を据えて、太子に問い続けられたのでしよう。さらにそれは、青少年期にとどまらず、80歳を過ぎてからも、太子を慕い、太子のすがたに我が身を照らされ生きた90年の生涯であったと言ってもよいと思います。
2022年、聖徳太子の1400回忌をお迎えするにあたり、親鸞聖人が仰がれた太子の恩徳を学び直す時ではないでしょうか。

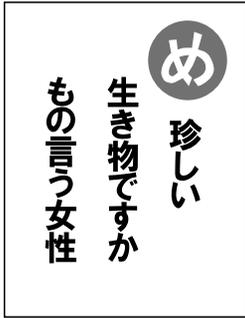
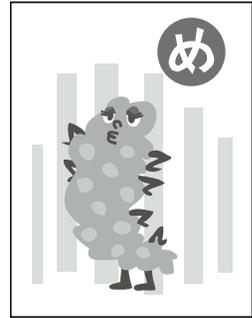
飛騨御坊ボランティア委員会活動報告
住民をつなぐ復興の夏まつり
今回は女川町宮ヶ崎地区の夏まつりに招待をいただき、飛騨の五平餅・みだらしだんご、子どもたちの遊びブースを提供し交流してきました。
震災以降復興の道のりのなかで宮ヶ崎地区も高台に新しく住宅が立ち並び、震災以前からお住まいの方々と、震災で住居を失われた方々とはじめての夏まつりでした。その中心には新しく作られたというやぐらがありました。宮ヶ崎の区長が、「このやぐらの作製には飛騨の皆さまから届けていただいた復興義援金を使わせていただきました。飛騨の皆さまの思いを形にして伝えていきたいという思いで作りました」と言われました。
夏まつりに参加していた子どもさんが、我々への感謝の気持ちをこめて募金をしてくれました。今後の飛騨御坊ボランティア委員会の活動に使ってくださいとのこと。
これからも、お預かりした思いを受けて活動していきます。



家族で話そう

女と男のナムアミダブツ ②④

藤場 芳子



女性医師

医科大学の入試で女性の受験生に恣意的な点数の操作をしたというニュースに「そりゃないでしょ！」と私は思わず叫びました。そして昔読んだ『花埋み』という本のことを思い出しました。日本で初めて女医になった荻野吟子について書かれたものです。時は明治維新の頃。16歳で結婚した吟子は夫から性病をうつされ、体調を崩して実家に帰ってき

「いまだ明治か」、そんなことが頭をよぎりました。

一見平等だけど

女性が男性中心の世界に入ろうとしたり、異論を唱えたりすると、「生意気」「出しゃばり」だという顔をされる場合があります。大つぴらに口に出す人はいなくても、何となくそんな気配が漂ったり、疎外感を味わったりしたことのある女性は多いのではないのでしょうか。

先日ある女性から電話がありました。男性が9割以上の会合で勇気を出して意見を言ったけれど、「冷やかな反応で、つらかった」と。一見平等、つまり誰にでも門戸が開かれているように見えていて、実際には男女によって対応が違っていたり、内側から閉めだそうとする圧力があるように思います。今回の句は「珍しい 生き物ですか もの言う女性」です。この背景には「女性は控えめがいい」という価値観があります。それを支持しているのは男性ばかりではなく、女性の中にもあるのではないのでしょうか。

「私の問題」

なぜそのように思うかと言うと、私にもそんな気持ちがかつてはあったし、正直に言えば今もあるからです。父と、母の両親が沖繩出身だという影響もあつてか、私は小学生の頃から米軍基地の問題等を通して平和や平等に関心を持っていました。でも、女性差別については全く考えたことがありませんでした。女性解放を訴えるウーマンリブの人たちがデモをする姿をテレビで見ても自分には関係ないと思ってい

ました。学生の頃につきあっていた彼氏からさだまさしの「閑白宣言」のレコードをプレゼントされて喜んでいたくらいですから、ずいぶんと能天気でした。そんな私が変わり始めたのは、大学卒業後に就職先がなかなか決まらなかつたことや、結婚・出産、退職を経験してからです。この世界は男性中心に回っていることにやつと気づき、性差別問題が「私の問題」になりました。それは私にとって嬉しい変化でもあり、同時に自分と向き合うことの始まりにもなりました。

「男尊女子」

自分と向き合い始めて気づいたことは、今まで自由にのびのびと発言していたと思っていたけれど、実は時と場合によって男の人を立てたり、波風立せずに一歩引くという処世術をいつの間にか身につけていたという事実でした。ずいぶん自分の発見でもありました。社会が女性に求める枠の中に私自身を押し込めることは苦しいことでもあるけれど、楽な生き方でもあったからだと思います。男性中心の社会を作っているのは女性自身でもあることをコラムニストの酒井順子さんは「男尊女子」という造語にして本を書いています。

さて、「女と男のナムアミダブツ」は今回で最終回です。文章を書くことは読者へのメッセージであると同時に、私自身との対話でもありました。性差別の問題が少しでも身近に感じていただけたとしたら幸いです。長い間、お読みいただきありがとうございました。

次回は佐賀枝夏文さんの「人生の「こんなこと」「あんなこと」⑤」です。

「回壇案内」

ご回壇は、ご坊の法座を地域寺院においてひらく開法の間です。

【9月】

- 20日(木)本教寺[西町]
23日(日)圓徳寺[漆垣内町]
24日(月)靈雲寺[神田町]
浄念寺[荏川町]
30日(日)随縁寺[上切町]
西念寺[国府町]

【10月】

- 14日(日)寶圓寺[漆垣内町]
還來寺[丹生川町]
15日(月)圓龍寺[大門町]
20日(土)了宗寺[荏川町]



御遠忌讃仰 第37回真宗公開講座

御遠忌法要は、親鸞聖人のご生涯を偲び、宗祖が伝えてくださったお念仏の教えを、現代を生きる私たち一人ひとりがいただきなすという意味があります。教えに我が身を聞く開法の間として、36年に亘って開かれてきた「別院真宗公開講座」を、今回は「親鸞聖人に遇う」をテーマに「御遠忌讃仰真宗公開講座」として開催いたします。

テーマ 「親鸞聖人に遇う」

- 1回目 絵解き法話
日時 2018年11月2日(金) 午後6時(『御伝鈔』後)
講師 榎野 明仁氏(岡崎教区本澄寺住職・三河すーぱー絵解き座座長)
2回目 法話
日時 2019年2月18日(月) 午後2時
講師 酒井 義一氏(東京教区存明寺住職・本山同朋会館教導)
3回目 法話
日時 2019年4月12日(金) 午後7時
講師 藤場 芳子氏(金沢教区常讀寺副住職・本山女性室スタッフ)
4回目 法話ライブ
日時 2019年5月10日(金) 午後6時(『御伝鈔』後)
講師 やなせ なな氏(本願寺派教恩寺住職・シンガーソングライター)

会場

高山別院本堂

参加費

無料

飛騨御坊 御遠忌通信 ⑬

○別院本堂の新たな姿

このほど耐震補強工事が完了しました。本堂の外観に配慮し、X状の鉄骨ブレース工法ではなく、H鋼を格子状に組み上げ、木調化粧材で飛騨の千鳥格子を表現するという方法で行われました。現在は足場が撤去され、新たな別院本堂の姿を見せています。



○本堂内陣の床を総ヒノキ張りに

内陣の床板は経年による痛みや汚れが激しく、また松や樺などの材が混在している状態であったため、この御修復事業を機に追加工事として床の張替えを行うこととなりました。床板をはがしていくと、焼け焦げた板が何枚か出てきました。おそらく、昭和30年御坊大火の際の残材だと思われます。御坊再建はご門徒の悲願であり、大変なご苦労があったことが偲ばれます。今回は、上等なヒノキ材を使用して全面張替えを行いました。



○内陣仏具のお洗濯

現在、内陣仏具の洗濯・修復が京都小堀仏具店において進められています。主な修復内容は、中尊前の須弥壇宮殿、祖師前厨子、卓や巻障子の補修、金紙張替え、漆塗り直し等です。各仏具の解体洗浄の後、木部木地修復が行われます。

○内陣の漆塗り

痛みの著しかった框の修復。既存漆を削り取り、木地を補修。砥の粉と漆などを混ぜた「さび」と呼ばれる下地材を3回も塗り重ね、中塗りに磨きをかけて、最終の漆塗りを行いました。この後、柱の漆磨きが行われます。



どなたさまもお参りください。